

自傷をくりかえす患者のこころのケアを考える事例検討

○小林 信^{1,8)}、新井 守²⁾、神澤 尚利^{3,8)}、須藤 公裕^{4,8)}、寺岡征太郎^{5,8)}、寺田 美樹^{1,8)}、
則村 良^{6,8)}、田上美千佳⁷⁾

- 1) 東京医科大学医学部看護学科、2) 帝京大学大学院医療技術学研究科看護学専攻博士前期課程、
3) 東京都立大学健康福祉学部看護学科、4) 医療法人愛精会あいせい紀年病院、
5) 帝京大学医療技術学部看護学科、6) 医療法人財団青溪会駒木野病院、7) 千葉大学大学院看護学研究院、
8) 精神看護ケア検討会事務局

本ワークショップでは、自傷をくりかえす患者さんのこころのケアを考える事例検討会を開催します。事例検討を通じて、自傷をくりかえす患者さんのこころはどのような状態なのか、そのこころをケアするとはどういうことか、どのような働きかけができるのかについて、共に学ぶことが本ワークショップの目的です。

B・W・ウォルシュ（2006/2007）は自傷を「意図的に、自らの意思の影響下で行われる、致死性の低い身体損傷であり、その行為は、社会的に容認されるものではなく、心理的苦痛を軽減するために行われる」と定義しています。自傷は心理的苦痛を和らげるための対処法とみなすこともできますが、くりかえすことで行為はエスカレートし、身体損傷の程度がひどくなっていく、自己破壊的なものです。そして、自傷は本人の身体だけでなく、周囲との人間関係、医療福祉スタッフとの援助関係にもダメージを与えます。援助者は自傷をくりかえす患者さんの姿に痛ましさを感じ、支援を始めますが、患者さんは自傷にすぎるしかないように、自傷をくりかえします。皆様も自傷をくりかえす患者さんを支援するなかでこのようなことに遭遇し、困難や憤り、無力感を感じたことは少なくないのではないのでしょうか。

自傷をくりかえす患者さんを支援するためには、患者さんのこころを理解した上で働きかけを導き出していくことが重要ですが、その方法として事例検討はとても有用なものです。自分独りで考えて解決策が見つからなくても、複数人で事例検討をすることで、考えが整理されたり、新しい視点を見つめることができたりした体験は誰にでもあると思いま

す。自傷をくりかえす患者さんのこころには何が起きているのか、そして患者さんのこころのみならず、患者さんの自傷が私たちのこころにどのように作用しているのかなど、今まで気づくことや考えることができなかったことを、事例検討への参加で、見つける体験をしていただければと考えています。本ワークショップは以下の構成で展開します。

【ワークショップの構成】

- 1) オープニング（趣旨の説明）
- 2) 事例紹介
- 3) 事例の理解とケアの検討
- 4) 事例検討を通して得た気づきや思いの共有
- 5) クロージング（まとめ）

本ワークショップにおける倫理的配慮として、参加者には開始前に守秘義務等への同意を確認し、同意書への署名を求めます。また、事例の情報が記載された資料は個人が特定されないように、本質が損なわれない程度で加工を施し、参加者の持ち帰りを一切禁止します。なお、ワークショップ中における録音や撮影も禁止します。

本ワークショップにおける利益相反はありません。

参加者の皆様が事例検討会を通して、自傷をくりかえす患者さんへのこころのケアについて考えることができるように、企画者みんなでワークショップに取り組みますので、興味・関心のある方の参加をお待ちしています。

B・W・ウォルシュ. (2006/2007). 松木俊彦, 山口亜希子, 小林桜児 (訳), 自傷行為治療ガイド (pp.22). 金剛出版.